

[特集I]

神戸原の「兵隊屋敷」

— 横浜警備隊と
橋樹郡保土ヶ谷町 —



ご自由にお持ちください

[展示余話]

横浜中央電話局員の戦中・戦後

— 川島善子氏の資料群より —

[資料紹介]

空の横浜

— 「海軍航空図」と館蔵戦前航空関係資料 —

ハマ発 NEWSLETTER 第43号 2026(令和8)年1月24日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団 〒221-0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453
題字ロゴ/高橋健介 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

特別展のご案内

本町通りを行進するアメリカ軍の車両 1953(昭和28)年
奥村泰宏撮影 栗林阿裕子氏寄贈 当館所蔵



【会期】2026(令和8)年1月24日(土)～4月12日(日)

横浜都市発展記念館令和7年度特別展×
埋蔵文化財センター令和7年度「横浜の遺跡」展

戦争の記憶 —横浜と軍隊の120年—

1945年の第2次世界大戦の終結から80年を迎えました。この間、日本は戦争のない時代を過ごすことができましたが、世代交代によって戦争を体験した人びとは少なくなっています。そうしたなか、地域に目を転じると、神社や寺院、公園、さらに景観には、近現代の戦争を語る“モノ”、痕跡などが数多く残っています。これらは地域に刻まれた「戦争の記憶」です。本展示では、1853年の黒船来航から1975年のベトナム戦争終結までのおよそ120年間を対象に、地域に残る遺跡や景観、モニュメントなどから横浜と軍隊との関係、さらに過去の戦争の記憶を追いかけていきます。

【図録】『戦争の記憶—横浜と軍隊の120年—』

横浜都市発展記念館

(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター/編

特別展関連事業

I. 展示解説 (全6回)

展示担当者が特別展の見どころを解説します。
当日直接会場にお越しください。

日 時 1/25(日)、2/8(日)、3/15(日)、
3/20(金・祝)、4/5(日)、4/12(日)
※いずれも13:30～14:15

会 場 横浜都市発展記念館3階 企画展示室
参加費 特別観覧券が必要です

II. 関連講座 (全2回)

「開港都市・横浜と2つの軍事拠点」

講 師 吉田律人

(横浜都市発展記念館主任調査研究員)

日 程 ① 2/21(土)「巨大軍都・東京と横浜」

② 3/21(土)「軍港都市・横須賀と横浜」

時 間 13:30～15:00(受付は13:00～)

会 場 横浜開港資料館講堂

定 員 各回50名 参加費 各回1,000円

申込方法 当館HPをご覧ください。

※有料のアーカイブ配信も行います。購入方法など詳細は追って当館HPでお知らせします。

III. 記念シンポジウム

「地域に眠る文化資源の発掘と活用

—横浜地域の「戦争の記憶」を中心に—

日 時 3/7(土)13:30～17:00

主 催 公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団

共 催 國學院大學研究開発推進機構

会 場 國學院大學横浜たまプラーザキャンパス
1号館1503教室(講堂)

定 員 先着200名

参加費 無料

申込方法 詳細は追って当館HPでお知らせします。

MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

『戦後80年 戦争の記憶 ～戦中・戦後を生きた横浜の人びと～』 ①

横浜都市発展記念館/編 定価2,200円

『運河で生きる ～都市を支えた横浜の“河川運河”～』 ②

横浜都市発展記念館/編 定価2,000円

『関東大震災100年 関東大震災と横浜 廃墟から復興まで』 ③

横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編 定価2,200円



横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間 午前9時30分～午後5時

(券売は閉館30分前まで)

■休館日 毎週月曜日・年末年始ほか

(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料

上記特別展開催期間 一般800円

小・中学生、および市内在住65歳以上の方400円

※毎週土曜日は大学生以下無料

※「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

※毎週第2水曜日「濱ともデー」は市内在住65歳以上無料

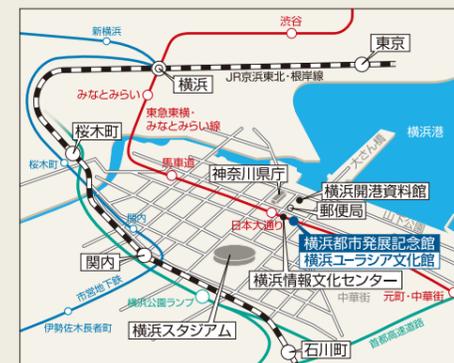
それ以外の期間 常設展のみ 一般200円

小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>

※本誌は当館ホームページでもご覧いただけます。



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- JR 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス・神奈中バス「日本大通り駅東庁前」下車徒歩1分



●表紙図版
横浜港に停泊する戦艦「比叡」とイギリス巡洋艦「サフォーク」
1934(昭和9)年
『横浜グラフィ』 横浜都市発展記念館所蔵

編集後記

前回の特別展では、横浜市民の戦争被害に焦点をあてた展示を行いました。今回の特別展は、戦後80年展示の第2弾として、横浜における軍隊と地域の関係性を文献資料のみならず、モニュメントや戦争遺構から読み解いてゆきます。当財団の多年に及ぶ研究成果が結集された展示となっておりますので、是非ご覧ください。(西)

◎次号発行予定 2026年7月頃



かつて横浜警備隊の兵営があった
保土ヶ谷区月見台・神戸坂
2024(令和6)年11月撮影

神戸原の「兵隊屋敷」

横浜警備隊と橋樹郡保土ヶ谷町

川県庁の要請を受けて陸軍兵力を派遣するとともに、三日、政府は戒厳令の一部条項を神奈川県にも適用する。陸軍の来援について出兵要請に尽力した神奈川県警察部高等課長の西坂勝人は、「之を見た海岸一帯の罹災民は如何に喜んだ事であるう。全く歓声を挙げ涕涙して之を迎へたのである」と回想している(神奈川県下の大震災と警察「警友社」一九二六年)。

軍隊の展開によって被災地の秩序は回復にむかったほか、インフラの復旧も進んでいった。そうした状況を受けて、九月十五日付の「横浜貿易新報」は社説で兵営の新設と一個連隊の配置を主張している。

同時期、東京市麻布区新龍土町の歩兵第三連隊の兵営は激震によって破壊されていた。未曾有の地震災害は軍隊にも打撃を与えており、郊外部への部隊移転など、軍事施設再編の噂も浮上した。その情報を入手した横浜市会は歩兵第三連隊の誘致に動き出していく(「横浜復興誌」第一編「横浜市、一九三二年」)。また、官民合同団体である横浜市復興会も一〇月六日に部隊誘致を決議、会長の原富太郎の名前で「横浜市警備に関する陳情」、「軍隊常設に付陳情」を総理大臣や陸軍大臣、内務大臣などに提出した(「横浜市復興会誌」横浜市復興会、一九二七年)。このような

横浜側の動きに対し、陸軍側は「憲兵又は警察の警備で足る事を何時迄軍隊に依頼するは不可である」としつつも、「連隊常置は之れとは別であるが都市防衛上必要だとは今回の経験で認められている」と部隊設置の可能性を示している(「夕刊横浜貿易新報」一九二三年一〇月七日)。

一月一六日、戒厳令の一部条項の適用は解除されたが、陸軍の兵力は残存、同二六日には、「横浜警備隊」として横浜市と隣接する保土ヶ谷町へ移った。その後、同町内の神戸原、天徳院裏の高台に兵営が完成すると、一二月六日、第一師団司令部は甲府から歩兵第四九連隊第二大隊の約一八〇人を同地へ移転させ、翌二四年一月九日には同第三大隊の四四〇人と交代させている。六日後の一月一五日に発生した丹沢地震では、横浜警備隊がすぐに対応しており、横浜市の警備体制は強化されていった。

二、横浜警備隊と地域住民の交流
平時における軍隊の任務は、有事に備え、兵士の訓練や教育を行うことで、兵営には練兵場が必要となってくる。一九二四年二月、横浜警備隊を管轄する第二師団の経理部は保土ヶ谷町の有力者である岡野欣之助と調整しつつ、面積約一万二〇〇〇坪を借用して練兵場を整備していった

れば会えない人物がすぐそばにいたのである。また、警備隊の兵営が「兵隊屋敷」と呼ばれていたこともわかる。

横浜警備隊の地域への接近はその後も続いていく。例えば、日露戦時の奉天会戦を祝した陸軍記念日(三月〇日)には、兵営の一般開放とともに、模擬戦闘が実施され、毒ガス戦など第二次世界大戦の戦訓を取り入れた演習も展開された。また、営庭では各種余興が披露されたほか、営門に続く道には屋台も並び、来訪者を楽ませた。さらに午後には、兵営内で保土ヶ谷町内の三つの小学校の運動会も催され、多くの人でにぎわった。この日、佐藤謙三も兵営を訪れており、日記に模擬戦は「あまりよくなかった」とする一方、「珍動物園は面しなかった」と感想を記している。神戸原の兵営は治安維持や軍隊教育を担う一方、これまで横浜になかった軍事的なイベントを創出していったのである。

三、横浜警備隊の廃止

一九二四年春、岡野欣之助は横浜警備隊に桜の樹木二〇本を寄贈するなど、兵営の環境整備につとめていく。一方、横浜警備隊として駐屯していた歩兵第四九連隊第三大隊は、五月一二日に歩兵第三連隊第一大隊の二二〇人と交代し、甲府へ戻っていった。これに際して保土ヶ谷町の吉田淳一町長は、私費で歩兵第四九連隊将校の慰労会を催したほか、神奈川県や横浜市も別に慰労会を実施している(「横浜貿易新報」一九二四年五月九日、一〇日)。

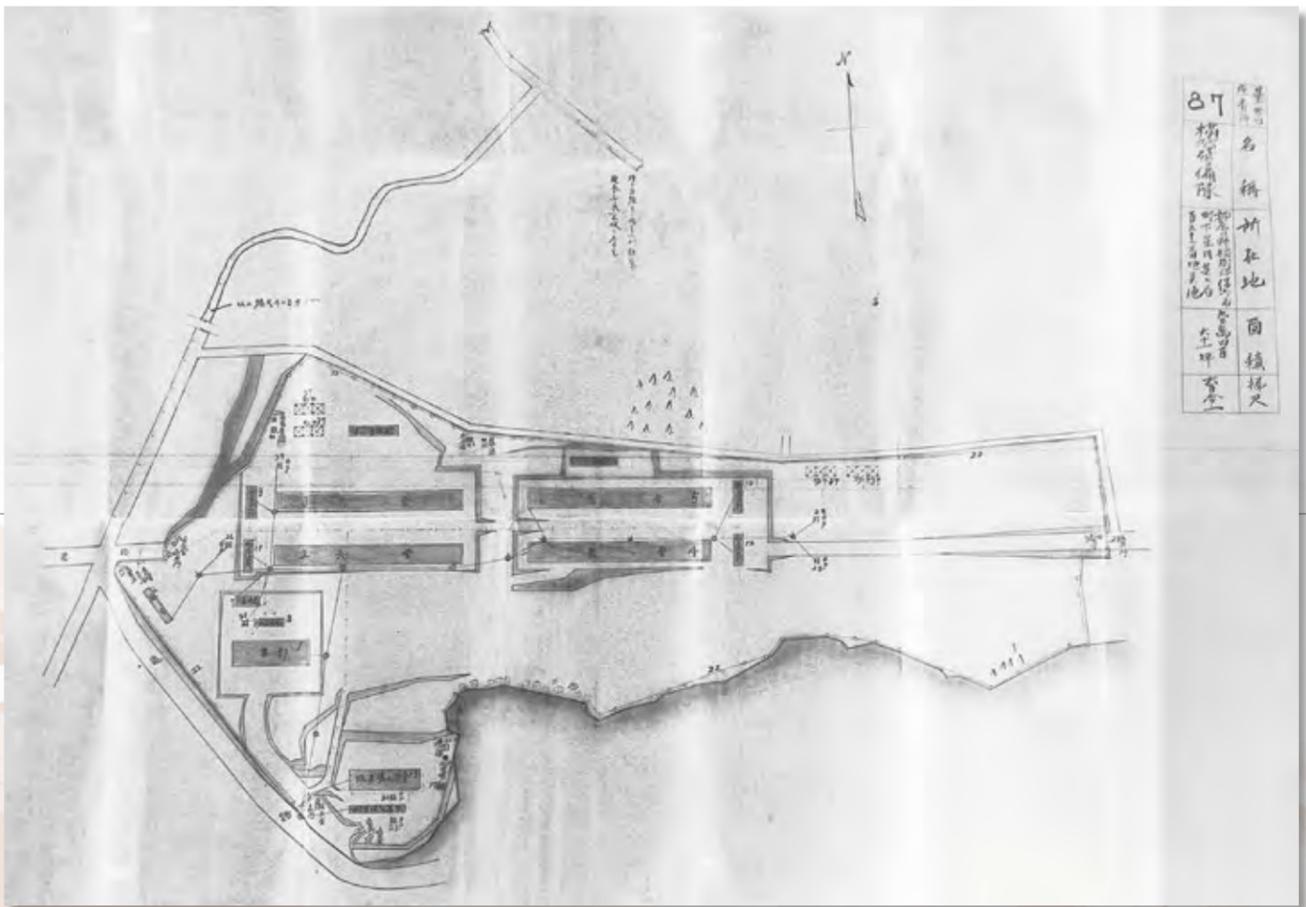
(「横浜貿易新報」一九二四年二月二日)。
甲府に比べて温暖な横浜は衛生状態もよく、「兵衛教育には頗る便宜である」と警備隊の将兵たちは喜んでた(同二月七日)。また、警備隊は演習等の公開を通じて軍事的な知識の普及を図っており、二月九日の土曜日には、保土ヶ谷町の青年団員や小学生を対象に兵営を公開、戦闘教練や露営演習、軽機関銃の空砲射撃などを実施した。この行事には、約一〇〇〇人の参加者があり、警備隊側も一般の参観・見学を歓迎するとしている(同二月一〇日)。同時期は第二次世界大戦後の軍縮ムードのなか、軍隊に対する批判が高まっていた時期でもあり、警備隊の姿勢には、それを改善する意図もあったのだろう。

他方、警備隊の構成員は地域にとっても身近な存在だった。徴兵制度のもと、現在の横浜市域を構成する橋樹郡、都筑郡の出身者は東京市赤坂区檜町の歩兵第三連隊に入営したが、横浜市や久良岐郡、鎌倉郡の出身者は山梨県甲府市の歩兵第四九連隊に入営することになっていた。横浜市民にとって歩兵第四九連隊が「郷土部隊」であった。横浜第二中学校(現横浜翠嵐高等学校)の生徒で、保土ヶ谷町在住の佐藤謙三(後の国文学者、國學院大學学長)は一九二四年二月七日(日)の日記に「おひる頃兵隊屋敷へ、晝店の春さんに伯父二人で面会に行つた」としている(「佐藤謙三日記」、横浜開港資料館所蔵)。おそらく「春さん」は近しい知り合いで、歩兵第四九連隊に入営していたと考えられる。本来であれば、甲府まで行かなければ

新たに駐屯した歩兵第三連隊は主に東京府東部および埼玉県東部の出身者によって構成される部隊で、これまでの歩兵連隊と比べ、横浜との人的なつながりは弱かった。しかし、六月に入ると、歩兵第三連隊の保土ヶ谷移転の情報が流れ始める。例えば、六月二九日付の「横浜毎朝新報」は「麻布第三連隊を横浜市に移転か」と報じ、陸軍省と横浜市が水面下で準備していると伝えている。さらに七月五日、第一師団長の石光真臣中将が横浜警備隊を視察すると、「横浜貿易新報」、「横浜毎朝新報」は部隊移転の準備ではないかと推測している。石光は「横浜貿易新報」の取材に対し、練兵場の改善などで保土ヶ谷移転の可能性もあるが、保土ヶ谷町の反応は冷めていると指摘している(七月八日)。

その後、歩兵第三連隊の移転をめぐっては、橋樹郡鶴見町(現横浜市鶴見区)や横浜線沿線の村々、埼玉県の川口町などが誘致に動き出したが、いずれも実現することはなかった。同時期、陸軍大臣の宇垣一成中将が四個師団を削減する大規模な軍縮を進めており、新たな兵営設置は認められなかった。一月一日、第一師団司令部は横浜警備隊の廃止を決定、五日、神戸原の兵力は麻布の兵営に戻った。これによって横浜周辺から陸軍は消えたが、関東大震災と横浜警備隊の設置は、横浜と軍隊との関係を変え大きな転換点となり、その後も誘致熱がくすぶり続けることになった。

(吉田 律人)



横浜警備隊の配置図 1924(大正13)年 防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵 ※原本の青図を一部修正した。

余話 展示

横浜中央電話局員の戦中・戦後

川島善子氏の資料群より

昨年開催した特別展「戦後80年 戦争の記憶―戦中・戦後を生きた横浜の人びと―」では、当館の前身施設である横浜中央電話局で戦時中に勤務していた川島（旧姓・服部）善子氏の資料を展示した。本誌前号及び展示図録では川島氏の横浜大空襲時の様子を紹介したが、展示終了後、川島氏より、ご自身のアルバム



① 日邦工業株式会社での夏季実習記念写真 1941年(昭和16)

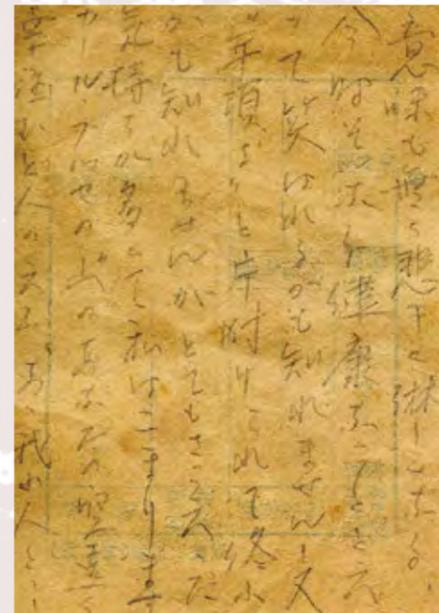
をはじめとした諸資料のご寄贈を頂くことになった。本稿では今回寄贈される資料をもとに、川島氏の戦中・戦後期の活動について詳しく紹介したい。

川島氏は一九二八年(昭和三)に横浜市中区(現南区)通町に生まれたのち、南区永田町の服部家の養女となり、優しい養父のもとで育つ。小学校は入学当初は横浜市立大岡尋常小学校であったが、一九三四年(昭和九)に市立井土ヶ谷尋常小学校(一九四一年(昭和一六)より国民学校)が開校すると、同校に転入する。対米英戦争前は、学校の体操の授業で薙刀の練習をしていたことが印象に残っていると回想されている。その後、川島氏は同校の高等科に進学するが、アルバムには当時井土ヶ谷上町に存在した、迫撃砲点火薬筒や狩猟用紙薬莖を製造する日邦工業株式会社での夏季実習の記念写真(①)が残っており、戦時色が濃い学校生活であったことが窺える。

川島氏は同校の卒業後に横浜中央電話局(以下、電話局)に入局するが、就職先は自分で選ぶことが出来ず、教師が成績順に割り振っていったという。最も算盤の上手な生徒は横浜貯金局に就職し、その他の就職先には電話局のほか、生糸検査所や鉄道会社などがあった。一九四

二年(昭和一七)四月に電話局に入局した川島氏は、三ヶ月間、電話事務員見習養成課程を受け、東京各地の頭に付く局番を暗記した。「丸ノ内23、日本橋24、神田25、銀座57、茅場町66、三田45」といったように、川島氏は今でも局番を記憶されている。その後、正規の職員として勤務に当たるが、当時の職員の勤務情景が窺える資料が、「電話交換受付書」(②)である。この資料は電話を受けた際に交換手が諸情報を記入する用紙であるが、興味深いのは裏面に記された職員へのメッセージである。ここには「意味も無く悲しく淋しくなる、今時そんな不健康なことを云って笑はれるかもしれませんが、年頃よ」と片付けられて終ふかも知れませんが、とてもさう云った気持ちが多くて私はこまります。カー

② 電話局局員の書いたメッセージ



ル・ブッセの山のあなたの空遠く辛い住むとひとの云ふ、あ、我れ人と」と記されている。現代でも授業中に教師の目を盗み、密かにメッセージをやり取りする文化があるが、これと同種のものと考えられる。困難な時代ではあるが、いつの世も変わらぬ繊細な女性職員の心の機微が推察できる資料といえよう。

また、川島氏の資料には当時電話局員が歌唱していた「通信歌」と「通信報国歌」の歌詞カード(③)も含まれる。当時、電話局は通信省の管轄であり、一九四一年(昭和一六)四月に省内職員を対象とした通信報国歌が結成され、全職員が団員となること定められていた。後藤康行氏の研究によれば、この組織は「通信部内全職員ノ和衷協同、勤労奉公ニ依リ通信報国歌ヲ挙グル」

③ 「通信歌」歌詞カード



一、御い成治き 日の本に
生れし歌 火と燃えて
我等通信 報国歌
誠を響ふ 實業高し

二、進む世界に 先がけて
朝夕勤く 智と技能
公衆愛ひ 勤勞に
生くる我等に 誇あり

三、降く明るく くらがねと
心も身をも 兼へつつ
悪信刺を踏みしめて
尊き使命 果さばや

四、見よや旭日に 照り映ゆる
大通信の 旗の下
力を集り いざ共に
皇國の爲に いそしまん

ことを目的としたもので、具体的な活動内容は団員の日本精神の涵養、体力の向上、福利厚生、業務の効率の向上と改善に関連する事業などを行うというものであった。「通信歌」は大坂中央電信局の武田秀雄が作成した歌であるが、その歌詞は「一、御い成治き日の本に 生れし 歡喜 火と燃えて 我等通信 報国歌を響ふ 意気高し」といったように戦時色の濃い勇ましいものとなっている。「通信報国歌」は鶴見郵便局の伊藤武雄の作成によるもので、こちらも勇ましい歌詞が特徴的である。川島氏はこの歌をよく職員と共に唱和していたことを記憶されており、当時の電話局における職場の雰囲気を感じることが出来る。

本誌前号で紹介した通り、川島氏は戦後も電話局にとどまり、勤務を継続した。電話局には戦後直後に占領軍兵士が入り、「連合台」と呼ばれた交換機が設置された。川島氏をはじめ、一五〇二〇名程度の職員が英語の特訓を受け、



④ 野澤屋上で撮影した同僚との記念写真 1951年(昭和26)



⑤ 野澤屋内のクリスマスパーティーで用意されたケーキ 1951年(昭和26)



⑥ 宮元町のカマボコ兵舎前で撮影された一枚 1952年(昭和27)

「AFコール(連合軍通話)・トール・オペレーター」と呼ばれる「連合台」での業務に付いた。この時期の業務では、東京や東北地方、鎌倉への通話が多かったという。当時電話局に来ていた占領軍兵士たちは皆親切で、身の危険を感じるようなことはなかったという。逆に兵士たちと親密になる女性職員が増え、これに違和感を覚えた川島氏は、タイピストの学校に通い、電話局を退職する。

その後川島氏は、米第八軍の「Quartermaster(米陸軍需品科)」に就職する。川島氏の職場は、占領軍に接収された中区伊勢佐木町の野澤屋ビル内にあった。当時、野澤屋内にはこの部隊の他にヨコハマベース司令部や購買部、技術部など様々な部署が入っており、一階はPX(米軍の売店)となっていた。川島氏のアルバムには、野澤屋ビルの屋上で撮影された同僚との記念写真(④)が残されており、多くの日本人が働いていたことが把握でき

る。また、野澤屋内で開催されたクリスマスパーティーの様子も撮影されているが、当時の日本人では口にするのが難しかった巨大なケーキが用意されている様子が写されている(⑤)。この後、同部署は南区宮元町に移転するが、この時の様子を記録した写真も複数あり(⑥)、占領期の横浜を写した貴重な資料となっている。

川島氏は現在九八歳であるが、戦中の電話局や戦後の横浜の様子を鮮明に記憶されている。戦中・戦後を生きた横浜の職業婦人の歴史を後世に伝える上で、川島氏の証言記録と今回寄贈を受ける資料群が極めて高い価値を持つことは明白である。今後当館では本資料群の調査研究を進めていきたいと考える。

(西村 健)
〔参考文献〕後藤康行「戦時下の通信職員組織・通信報国歌に関する基礎的研究」『郵政資料館 研究紀要』第五号、二〇一四年三月。

空の横浜

「海軍航空図」と館蔵戦前航空関係資料

◀2 『時間表』

1937年 当館蔵

①の別刷として発行。日本語版と英語版の2部を確認できる。国内便、朝鮮半島を經由して大連・満洲方面に向かう便、新線の東京新潟線や台湾島内線等が掲載されている。

▼① 『定期航空案内』

1937年 当館蔵

通信省・日本航空輸送株式会社発行。案内の表紙に赤い飛行機が描かれている。同社は中島ダグラスDC-2、フォッカーF.VIIb、中島スーパーユニバーサル等の飛行機を使用して、旅客、貨物、郵便輸送を行った。

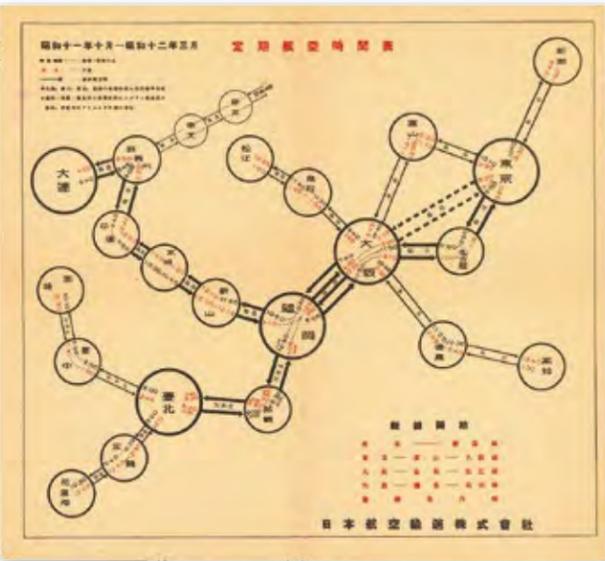


はじめに

多くの船が行き交う港都横浜は、飛空艇が発着する空の玄関口でもあった。本稿では、大日本航空株式会社横浜支所に配属され、通信士をつとめた人物が所蔵していた「海軍航空図」を中心に、館蔵の戦前航空関係資料を紹介する。

民間航空輸送の広がり

第一次世界大戦後の1920〜30年代、飛行機を使用した民間航空輸送が急速に広がった。1929（昭和4）年に設立された日本航空輸送株式会社①は、国内便や日本本土と朝鮮、台湾、満洲を結ぶ国際便を就航した②。日中戦争勃発後の1938



③ 「海軍航空図第1号 東京海湾至潮岬」

1934年 当館蔵

水路部発行。左上に水路部の印と「定価金4円50銭」の情報が印刷されている※1。水路部調製の航空図誌は日本航空輸送株式会社の本社営業課や各営業所で購入してきた（『定期航空案内』）。その後、秘扱いとなると一般には利用できなくなった（坂戸2002）。

※1拡大



⑤ 凡例

年には、民間航空輸送会社を統合して大日本航空株式会社が設立される。横浜海軍航空隊の施設内に横浜支所を置いた大日本航空株式会社は、横浜・サイパン・パラオ・トラック・ヤルトを結ぶ南洋の定期航路を確立し、根岸湾に横浜水上飛行場が完成すると支所を同所に移転。飛行場は川西四発式飛行艇による南洋航路の起点となる（大日本航空社史刊行会1975）。同社の南洋航路は1941年の対英米開戦後、海軍の軍用定期航路となり、大日本航空で同輸送に従事する者は海軍の嘱託とされた（日本海軍航空史編纂委員会1969）。

「海軍航空図」の原所蔵者の平岩勇氏（1921年—1996年）は、1942年1月に大日本航空株式会社に入社。横浜支所配属後、海軍の徴備輸送機隊の所屬となり、通信士として横浜南洋間の軍用定期航路の飛行に従事した。1943年8月、同盟通信社所屬となり、羽田から国内を経て台湾、中国、東南アジアへ至る要務飛行に従事。その後、陸軍第1気象連隊（中部第131部

隊）無線中隊へ入営し、水戸陸軍飛行学校（修了時は仙台陸軍飛行学校）の研修課程修了後、水戸陸軍航空通信学校に配属。戦後復員した。「海軍航空図」は、平岩氏が大日本航空株式会社入社以降、軍用定期航路や要務飛行の際に使用したものである。

「海軍航空図」に記された東京湾

「海軍航空図」は水路部（現海上保安庁海洋情報部）が作成した。航空図とは、飛行機の航法に必要な航空施設、航空目標等の情報を表示した地図のことをいう。水路部は1871（明治4）年設立の海軍部水路局を前身とする海軍の独立庁で、水路の測量、兵要・一般用の水路図誌の調整を掌った。「海軍航空図」は1934年に「第1号 東京海湾至潮岬」が発行され、区域を拡大して終戦までに200図以上が作成された（関川1969）。ここでは当館が寄贈を受けた「第1号 東京海湾至潮岬」③、「第102号 東京海湾至北海道」の2点のうち、「第1号 東京海湾至潮岬」の東京湾周辺が記された部分④に注目して、海軍航空図の特徴を見てみる。

「第1号 東京海湾至潮岬」は縮尺50万分分の1の航空図で、東は千葉県の大吠埼、西は和歌山県の潮岬、南は東京島嶼の八丈島、北は長野県の諏訪湖までが

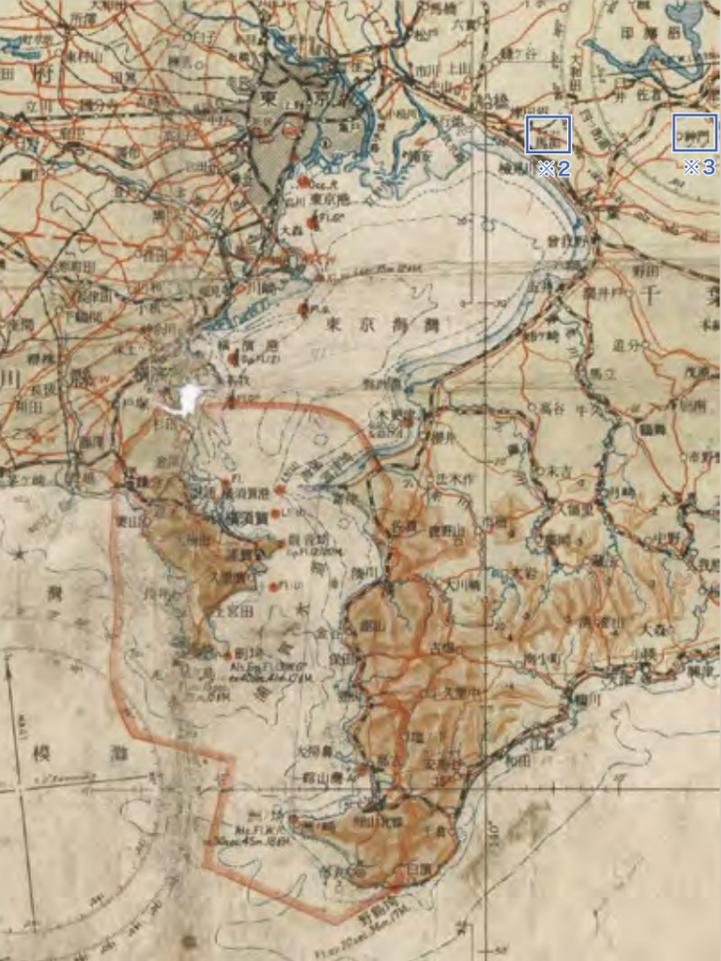
津、富津に広がる遠浅、等深線などの情報も藍色で記されている。これらの情報は、最新の海図及び陸図を資料としたという（坂戸2002）。

おわりに

「海軍航空図」を中心に当館が所蔵する戦前航空関係資料について紹介した。横浜水上飛行場について、当館では今回初めて関係者から資料の寄贈を受けた。空の横浜は、戦前、戦時期の日本と南洋をつなぐ重要な航路だったが、その拠点となった水上飛行場については不明な点も多い。今後も、資料の発掘、調査、研究を進めたい。

参考文献

- 関川精一「航空図の歴史と将来」（『地図』Vol.7 No.3 1969年）
- 日本海軍航空史編纂委員会編『日本海軍航空史（3）制度・技術篇』時事通信社1969年
- 大日本航空社史刊行会編『航空輸送の歩み 昭和二十年迄』日本航空協会 1975年
- 坂戸直輝「海図に関する昭和の技術小史―水路部とともに歩んだ60年―」（『地図』Vol.140 No.2 2002年）（松本 和樹）



④ 東京湾要塞周辺

□ は筆者加工

範囲となっている。航空図には東京湾周辺を見るだけでも飛行機の航法上必要な情報が詳細に記されている⑤。1931年に開港した羽田飛行場は民間定期航空路の起点となり、三浦半島と房総半島に挟まれた浦賀水道周辺は東京湾要塞として飛行禁止区域となっている。東京を中心に高压電線が張りめぐられ、各所に航空灯台や無線電信局所が設けられている。地名の表記にはすべて漢字、片仮名が用いられ、難読地名には馬加（※2）、神門（※3）のように上部にルビが振られている。埋め立ての進む鶴見・川崎の京浜運河、浦安や木更